

文部科学省

インクルーシブ教育システム構築モデル事業に取り組んで

～交流及び共同学習の実践から～

福井県立嶺南東特別支援学校

教諭 伊藤ゆかり

若狭湾

美浜町

敦賀市



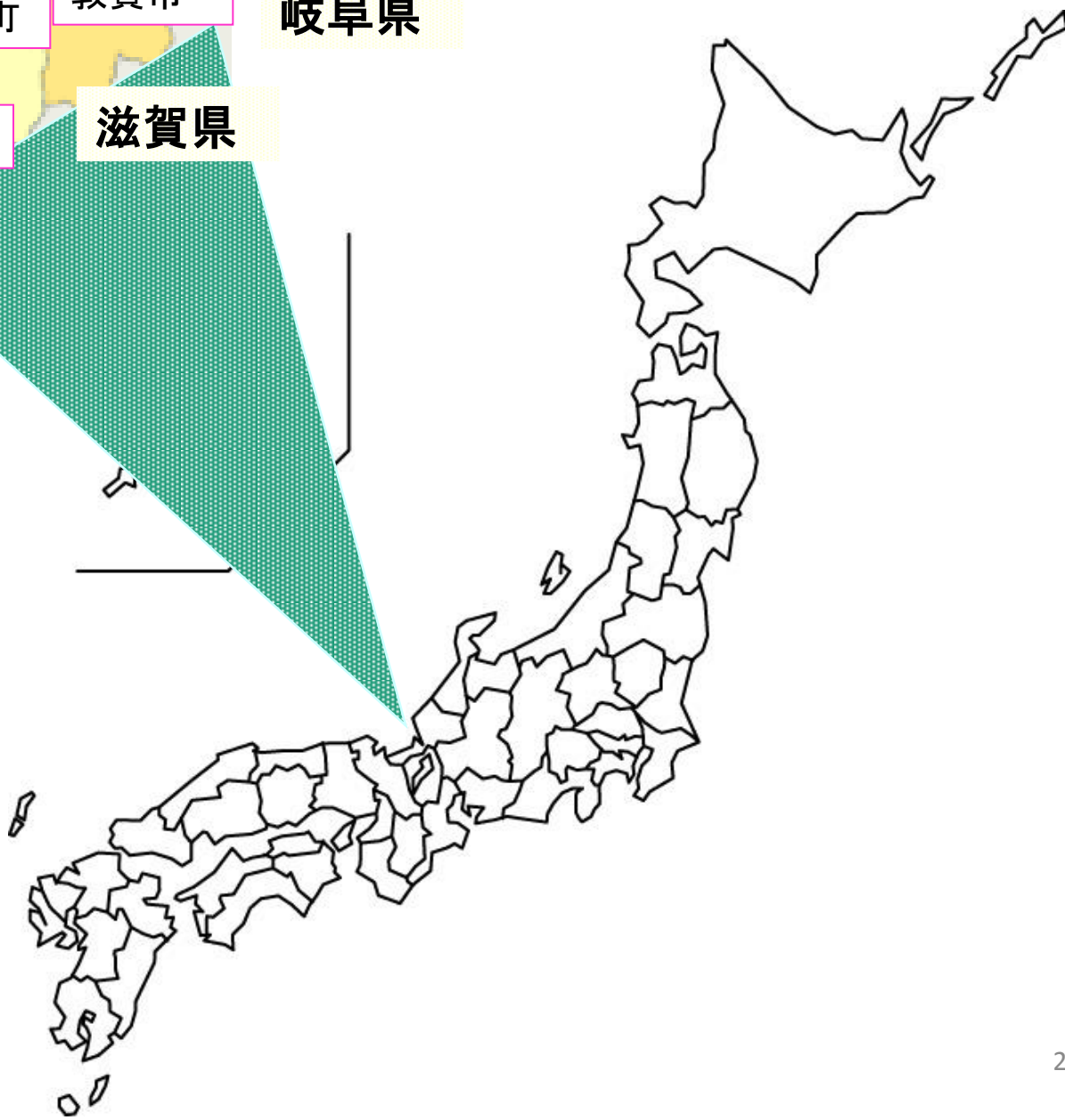
若狭町

滋賀県

京都府

嶺南東特別支援学校校区

岐阜県



本校の交流及び共同学習全体の課題

- ①教員の温度差解消
- ②社会と学校とを結ぶ交流及び共同学習
- ③希望しない保護者へのアプローチ
- ④年間数回、交流及び共同学習をしたことで、個々に付いた力の検証
- ⑤居住地域と個人を結ぶ交流及び共同学習
- ⑥継続して交流及び共同学習を行ったことで付いた力や成果の追跡
- ⑦思春期以降の交流及び共同学習

福井県の「交流及び共同学習」の推進施策

H25～27年度・・・「居住地校交流」を中心に推進

H28～31年度・・・「学校間交流」を中心に推進

※合理的配慮協力員（交流コーディネーター）を
県内に6名配置

- ・「交流」実施における指導・助言
- ・小中学校教員を対象とした特別支援教育に関する教員研修



【福井県教育振興基本計画への位置づけ】

H31年度までに、県内全ての公立小・中学校と
特別支援学校が「交流」実施

福井県の「交流及び共同学習」の実施状況

(H28年度の実績)

- ・公立小学校：122校 / 191校
- ・公立中学校：43校 / 74校

全体で
約62%の
小・中学校
が実施

特に・・・

「居住地校交流」実施率

- ・小学部在籍児童：55.8%
- ・中学部在籍生徒：20.7%

特別支援学校在籍児童生徒の約40%が実施

モデル事業と既存の取組の充実

①合同研修会

②合理的配慮協力員活用

③先進校視察

④インクルーシブ教育推進会議

⑤交流推進委員会

⑥交流パネルの展示

⑦交流新聞発行

新

①居住地校交流

②学校間交流

③間接交流

④校内交流

⑤地域交流

既存

- * 関わる全ての関係者が同じ方向を向く
- * 地域のセンター校として交流を推進

交流及び共同学習を推進するためのポイント

交流及び
共同学習の
推進

9 実践共有

1 保護者の理解

8 個々の教員の取組
理解協力

2 教員間
共通理解

7 外部支援者合理的配慮協力員

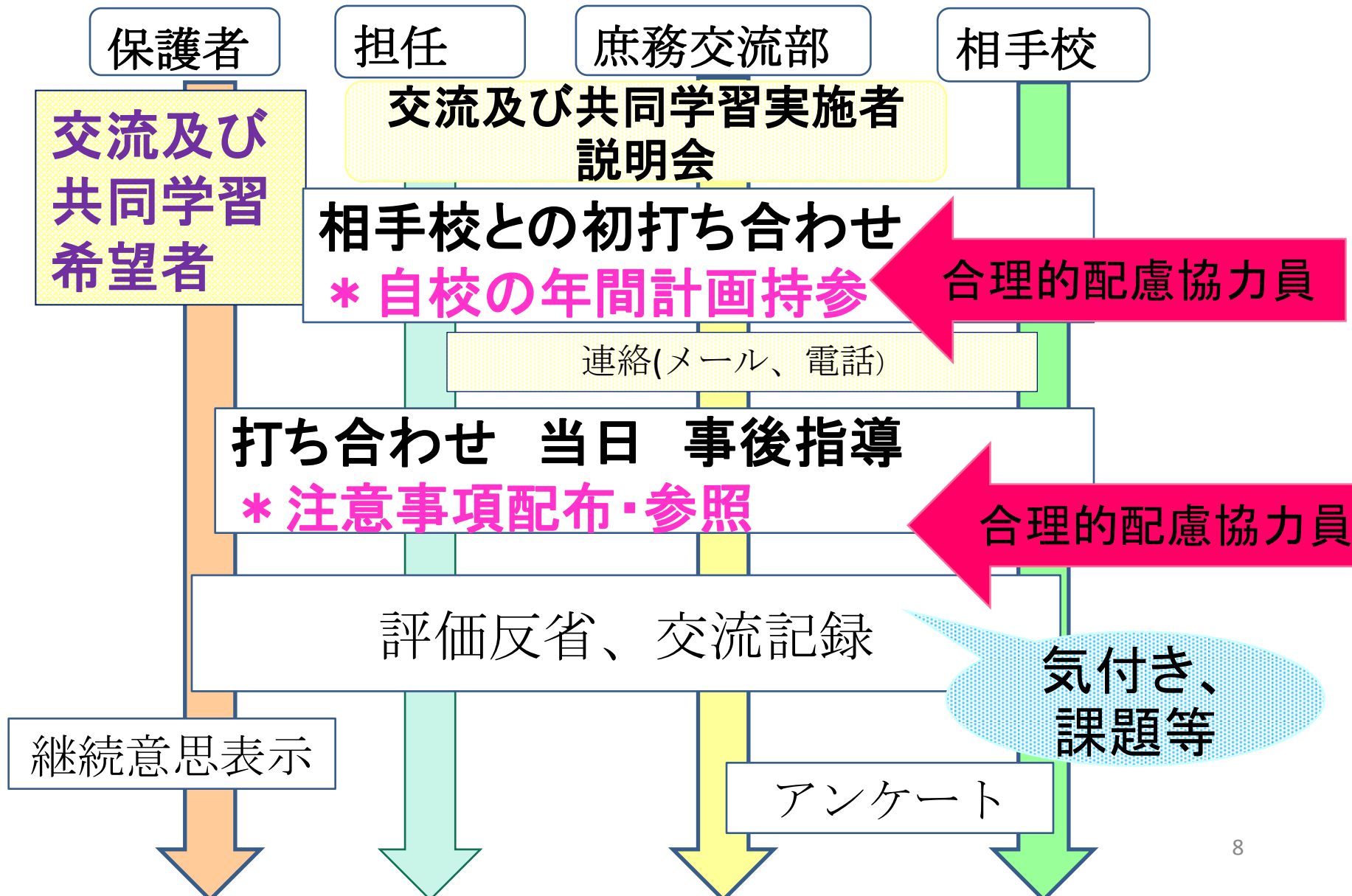
3 管理職の
理解・協力

6 交流チーム
+ 事務職員

4 年間計画
省察 (PDCA)

5 体制 ラインの力

居住地校交流実施者説明会



居住地校交流の充実に向けた留意点

1 教育課程位置づけ

各教科、特別活動
総合的な学習の時間等

2 安全：登下校、学習活動、非常災害時

3 事前指導・丁寧な打ち合わせ

他に有効なこと

出前授業（特別支援学校、障害者本人、授業内容、教育活動、本人の好きなこと）、事前学習をする
自己紹介カード、ビデオレター、お手紙や学級通信

平成26年度小学部居住地校交流 実践事例①【Aさん 知的障害】

相手校：敦賀市立T小学校3年3組（通常学級）年2回

1回目 特別活動

- ◎目標 お互いのことを知って、仲良くなる
- ◎内容 ・あくしゅであいさつ・「ビリケン体操」・ゲーム・感想の発表
- ◎支援 ・打ち合わせ・出前授業・事前指導・写真掲示・当日のスケジュール作成

～結果～Aさんのことを知り仲良くしたいと思ってくれる友だちが増えた。■

2回目 図画工作科

- ◎目標 見通しをもち、行動する友だちと協力してパラバルーンを作る
 - ◎内容「ビリケン体操」「パラバルーン」の制作
 - ◎支援・丁寧な打ち合わせ・本校での事前学習・当日のスケジュール作成・出前授業
- ～結果～友だちと助け合いながら協力して制作することができ
・クラスに溶け込んでいた。



本校教員：Aさんにはもちろん、相手校にとっても意味のある充実した時間だった。

相手校教員：普段とは違う子どもの姿を多く見た。

合理的配慮協力員：事前指導がいきてみんな仲間という気持ちで双方の子供に湧いた暖かな交流及び共同学習だった。

保護者：自然な関わりができこの関係の継続を望む。

2回の交流及び共同学習で事前の打ち合わせや各学校での事前学習の大切さを再確認した

作成したパラバルーンで遊ぶ

平成27年度小学部居住地校交流 実践事例③【Cさん 病弱(心疾患)知的障害】

相手校: 若狭町M小学校 2年生 通常学級と3回

1～3回 音楽・特別活動等

◎交流のねらい

- ①居住地の児童と共に学ぶ機会をもち、相互理解を深める
- ②集団で活動する経験を積む

＜学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮＞

- ・練習時間の確保 → 毎朝の活動に取り入れ
- ・人前で歌う経験を積む → 安心して参加

音楽・給食好き、恥ずかしがりや、
集団生活に不安が大きい



1回目の様子 media1.mp4



3回目.m
3回目の様子



相手校：児童・教員・学級 の変容

児童 第1回目～第3回目

目線を同じ高さにして、話しかけたりじゃんけんしたりした

失礼と思われる言葉がなくなった。

教員

多忙感→回を追うごとに意識変化

学級

Cさんを特別視する雰囲気は少なくなった。

「Cさんができることまでお手伝いしてしまうと、Cさんにとってよいことではない」と考え、Cさんの意思を聞いていた。

Cさんの堂々とした姿に「すごい」と感動

モデル実践による課題へのアプローチ

- ①教員の温度差解消へ一石
- ②社会と学校とを結ぶ交流及び共同学習
(将来への繋ぎ)
- ③保護者へのアプローチ
- ④一年間の成果の検証
- ⑤居住地域との交流
- ⑥継続実施による成果と課題の追跡
- ⑦思春期(中・高学部)の交流
- ⑧自己肯定感(授業での充実感・達成感)
- ⑨多様な学びの場を経験
- ⑩単発・イベント的→連続・積み重ね

心のバリアフリー推進に必要な風 「上の風」

在籍中全員
が経験必須

継続できる
条件整備

経営計画
組織作り

管理職意欲

上の風

文部科学省
厚生労働省
教育委員会

体制作り

交流及び共同
学習推進員・室
関係者の共有

出前授業や事
前指導の必要
性

計画・省察
(PDCA)

心のバリアフリー推進に必要な風 「外の風」

地域の理解

地域・学校
との架け橋

共有の機会

皆が当事者意識

外の風（保護者・地域の
学校・地域住民等）

意識の垣根
をなくす調整

心のバリアフリー推進に必要な風 「専門性の風」

教職員
共通理解

管理・運営

個々の取組
理解・協力

専門性の風

時間
事務
実践

将来の支
援者育成